

現代文

【問題二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔からよく、「文化が違う」という言いかたがされる。そして例としてよく、四という数字を不吉と考えるか気にしないか、そういう衣食住の例が挙げられてきた。こうした生活様式の違いは確かに目につくし、明治期の作家の随筆などを読んでいると、そのようないわゆる「文化（衣食住）の違い」に戸惑ったという面白おかしいエピソードがたくさんでてくる。

けれども日本の生活様式は、明治の文豪が留学した時代とつづさに比べると、すでにかなり西欧化している。四という数字を不吉と考えるか気にしないかすることに戸惑う現代人はあまりいないだろうし、むしろ私たちが150年前の日本に住むことになった場合のほうがカルチャーショックは大きそうだ。

ところが、私が、「外国に暮らしていた」と話すと、それだけで「文化の違いで困ったり驚いたりした体験がありますか」とか、「異文化交流のために心がけるべきことは」などという質問をされることがある。おそらく質問者にとつては「よく知らない場所だから、なにか違う文化があるのではないか」という想定からでた素朴な疑問だろうし、そう訊かれるとこちらもつい真面目に（なにかあったらどうか）と考えてしまいがちだ。ロシアならやはり寒いので防寒の知恵が浮かぶし、山岳地や砂漠にはそういう場所ならではの工夫がある。でもそれは文化というよりはむしろ自然や気候の問題で、ロシアと北海道とカナダで同じような防寒対策をしていたりするわけだが、ここで訊かれているのはそういうことではなさそうだ。だとしたらこの「文化の違い」「異文化」とは、いったいなにを意味するのだろうか。

まず考えとけないのは、「文化」ということにはあまりにも膨大な意味や解釈があつて、誰もが同じようにその語を理解しているわけではないということだ。

A、「あの人は文化的だ」という場合、芸術への造詣が深いとか、マナーや礼儀を重んじるとかいったことが念頭に置かれる。この場合の「文化」は歴史ある古い用いられたかで、「文明」と語義が近い。いっぽう、国や民族とセットで用いられる「○○文化」の場合、特定の集団やグループに帰属あるいは由来するとされる独自の生活様式などがイメージされる。さらには「**Z**」のように現代社会の特徴を言い表すために「文化」が用いられることもある。さあ大変だ。ややこしくなってきたぞ。こういうときは学者先生の知恵を借りよう。ようし、その名も『文化とは何か』（大橋洋一訳、松柏社、2006年）という本を書いている、テリー・イーグルトン（1943〜）を呼んでみるぞ。イーグルトン先生、いかがですか。するとイーグルトンはふむふむ、とうなずいて答えてくれる——「肯定的なものとは否定的なものとの両極の間で文化の概念は現在揺れ動いている。（中略）だから文化概念の社会史は類のないほど錯綜し両面的なのである」。

B「文化」の定義はかなり混沌とした状況にあつて、イーグルトンはこの本のなかで「文化」という語が歴史のなかで担ってきた数多くの意味やニュアンスをひもとうとしてくるのだ。でもそれら無数にある理解のうち、私が大切に選びとっているのは、「文化とは、人と人がなにかしらの共通の様式を用いて理解しあうための営みである」という考えかただ。それは、「かつては、合意の領域であった文化がいまや闘争の領域へと変貌」してしまった——つまりは、理解しあう営みという最も重要な点がおろそかになって、互いの違いを強調し、優劣を決めたがるようになってしまった現代において、文化をふたたび「合意の領域」にたちかえらせる考えかただからだ。音楽という芸術分野を思い描くとわかりやすい。人間は同じ楽器を^⑤ヒいたり、いくつもの楽器を合わせて演奏したりすることによって音を生みだす。音

楽をやる人にとって、同じジャンルの音楽をやっている人というのは、当然ながら「共通の文化」を持つ人々である。ピアノならばピアノの、チェロならチェロの、ネイロのために技術を駆使し想いをこめ、よほど耳のいい人でないとわからない。ビミヨウな音の違いにも気づき、音によってわかりあう。もちろんそれをひとつの「文化」とみなすにあたってはさまざまな条件がつく。

たとえば、私の通っていた文学大学で20世紀のロシア文学を教えていたセルゲイ・フェジャーキン先生は、クラシック音楽の作曲家スクリャーピン、ムソルグスキー、ラフマニノフの伝記を著していることでも知られる音楽マニアだが、あるとき授業にラフマニノフのピアノ曲『鐘』のオンゲンを持つてきて、みんなに聴かせてくれた。C この曲の音にロシア正教会の鐘の音が重ねられていることを解説し、さらにそれを念頭に置いて書かれた文学作品の話をして「これがわからないと読んでもわからないですからね」と説明した。つまり宗教的要素が音楽に、そして音楽が文学に、追加の要素として加わっているということだ。

すべての文化は多かれ少なかれ複合的なものだから、こんなふうに別の種類の文化がふまえられている例は珍しくない。けれどもそれらはあくまでも付加的な要素であって、ひとつひとつの文化はその技術や知識を身につけた人々の共有する認識こそを大切に、「人と人が共通の様式を用いて理解しあう」という原点に基づき、日々刻々と姿を変えながら、より広く深い「理解」の方向へと進むべきものである。

ここで、最初の質問に戻って、考えてみよう。私が外国に暮らしたという話から、質問者はなかば自動的に「異文化」という単語を導きだしてしまっている。これはすでに質問のたてかたがおかしいのである。「外国」と聞いてそれをすぐに「異文化」というイメージにつなげてしまう人がまず認識を改めなければいけないのは、「文化」の枠組みは場所（ましてや国籍や民族で）決まるものではないということだ。

なぜこれにこだわるかという点、「異文化」という考えかたには前提として「自分の（属する）文化」というものが不可避的に（しかも自ら選びとったものではなく、生まれた国や民族に帰属させられるものとして）想定されていて、それはさきほど触れた国や民族の冠せられる「○○文化」と結びつき、簡単に排外的な姿勢（「異なる」ものに対するソガイや排除）につながってしまうからだ。

奈倉有里『ことばの白地図を歩く 翻訳と魔法のあいだ』より

問一 文中の①から⑩について、漢字はその読みをカタカナで、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 文中の A から C に入る最も適切な接続語の組み合わせはどれか、記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|-----|---|-------|
| ア | A | そして | B | つまり | C | ところで |
| イ | A | ところで | B | つまり | C | そして |
| ウ | A | ところが | B | つまり | C | そうすると |
| エ | A | だが | B | しかし | C | また |
| オ | A | また | B | なお | C | ときに |

問三 傍線Xの「つぶさに」の意味は何か、最も適切なものを選び、番号で答えなさい。

- ① きちんと ② するどく ③ 大まかに ④ 詳しく ⑤ ゆっくりと

問四 傍線Yの「帰属」の対義語は何か答えなさい。

問五 文中の Z に入る最も適切な語句を次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 日本文化 ② 大衆文化 ③ 消費文化 ④ 外国文化 ⑤ 食育文化

問六 傍線部1「私が大切に選びとっている」とあるが、それはなぜですか文中の言葉を用いて答えなさい。

問七 傍線部2「こんなふうに」とあるが、具体的に述べてある箇所を抜き出して答えなさい。

問八 傍線部3「最初の質問」とあるが、その内容を述べている箇所を二十五字以内で抜き出して答えなさい。

【問題二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

もともと、韓国の建築には^①カンシンがあつた。韓国の障子が好きだったからである。日本の障子と韓国の障子とは似ているようで、まったく違う。日本の障子は室内側に木の枠を持ってきて、外側は紙貼りとなる。逆に韓国の障子は、室内側が紙貼りで、外側に木の枠が見える。室内から見ると、紙の向こう側に、木の枠の影が透けて見える。

この^Aディテールの違いの奥に何がひそんでいるのか。そこには、自分のまわりの環境をいかに構成していくかという設問に対する、二つの対照的解答が見え隠れする。紙が木の枠の外にあるのか内にあるかで、生物としての人間の、世界に対するスタンスの違いが見え隠れする。

具体的に言おう。障子の木の枠は構造であり、骨である。紙は表皮であり、現象である。韓国において、構造(枠)は表皮(紙)の向こう側にあり、表皮で^②隠蔽される。隠蔽しなければならぬほどに構造は強く、たくましい存在であつた。X、日本において、構造(枠)は弱く、繊細である。弱く繊細なものへと構造を削り、しぼり上げることが、日本建築の目標であつた。そのしぼりにしぼったか細い構造を紙の手に露出して、その細さをめるのである。

韓国では、構造を細く、薄く、しぼりあげる指向がない。紙の裏側に透けて見える木製の太い枠(構造)が、日本人の感覚からいうと耐えがたいほどに、^③武骨で、^④粗々しい。一方、日本の障子においては、紙の手前に露出される木の枠は、か細く繊細である。姑息ともいえるさまざまテクニクを用いて、可能な限り、^⑤華奢な存在へと枠がそぎ落とされていくからである。たとえば枠の部材の先端を斜めにカットして細くみせたり、小段と呼ばれる小さな切込みを入れて、枠の先端を細く見せる。

^B日本と韓国の障子のデザインの差異は、自然に対する、基本的スタンスの差異なのである。朝鮮半島ではまず、^⑥カコクな自然があつて、その自然の強度から身体を守るために、太い骨が必要とされた。その武骨な骨と人間との間にやわらかな紙がはさまれる。自然が厳しいからこそ、骨が太いからこそ、やわらかな紙が必要とされるのである。紙のやわらかさが身にしみるのである。

日本の自然ははるかにマイルドである。自然と身体の間を紙をさしこんでさらにやわらげる必要はない。日本の障子に使われる和紙は、身体を守るに必要な「厚み」がなく、ざらつく外光を白い光に^⑦転換するための極薄のスクリーンにすぎない。障子の棧もまた、やさしい自然と身体の間を^⑦ジャマにならないように、どんどん細く繊細になっていったのである。韓流は紙によって自然から身体を守り、日本流は枠を細くして身体と自然をつなぐのである。(中略)

⑧ ヨウヤクすれば、世界に対して、日本と韓国は対照的な方法で対応してきたのである。日本流は、建築の柱や障子の^⑨ 棧を細くしていったように、自分を「小さな」物で取り囲み、まわりの世界を小さくやさしい環境へと改変していく。日本流だと、結局、自分の世界にできる場所は限界があり、その「小さなもの」で満たされた繊細な世界に閉じてしまう。一方、韓流は、一方的に「小ささ」を追求していかない。世界の大きさ、荒々しさに合わせて、世界と自分の間に適切な「小ささ」を挿入していくあの韓流障子の紙でくるむディテールのように。世界が荒れはじめたときに、どんな粗々しい世界とも^⑩ チョウセイ可能ならフな韓流は力を発揮するのである。

隈研吾『小さな建築』より

問一 文中の①から⑩について、漢字はその読みをカタカナで、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 二重傍線部A「ディテール」という言葉の意味に最も近いものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 細部 イ 概要 ウ 目的 エ 概念

問三 文中 に入る最も適切な接続詞を選び、記号で答えなさい。

ア そのため イ また ウ 一方 エ つづいて

問四 傍線部B「日本と韓国の障子のデザインの差異」とあるが、何の差異から来ているか、本文中から抜き出して答えなさい。

問五 日本の障子における姑息ともいえるテクニクの例を本文中から抜き出しなさい。

問六 日本の障子と韓国の障子のデザインは、自然とどのように向き合っているか、本文中の言葉を用いて説明しなさい。